

## 群衆モデルの三様 — 集合体・半意識的集合体・結集体 —

駿 河 昌 樹

- 1 はじめに
- 2 純粹状態の群衆 *la foule à l'état pur*、または集合体 *agrégat*
- 3 結集体 *rassemblement* と集団心性 *mentalité collective*
- 4 半意識的集合体 *agrégats semi-volontaires*
- 5 革命的集団心性 *mentalité collective révolutionnaire* と革命的群衆 *foules révolutionnaires*
- 6 平準化作用 *nivellement*
- 7 集合体・結集体モデルの適用

### 1 はじめに

フランス革命を発生させ、その動力となった強力な概念のひとつにスイエス Sieyès の国民論があるが、それを支える彼の政治社会モデル<sup>(1)</sup>を見ると、個人から集団に到っていく過程があまりにシンプルに粗雑に叙述されていて驚かされる。

個人意思 *volontés individuelles* の時期と呼ばれる第一期には、「かなりの数と見なしうるだけの人数の孤立した *isolés* 個人たち *individus* がいるものとし、彼らは結びつき *se réunir* を望んでいるものとしよう。この事実だけで、彼らはすでに国民を形成している」<sup>(2)</sup>とされ、次の共通意思 *volonté commune* (現実共通意思 *volonté commune réelle*) の時期とされる

第二期には、「社会への参加者たちは、彼らの結びつきに確かさを与えたいと望む。それによって、彼らは目的に達することを望む。そのため彼らは協議し、公共で必要とされることについて、また、それを供給する手段について、合意形成を行う」<sup>(3)</sup>とされている。

考察する上で、集団や社会、国民が形成されていく過程を、意思の容態に注目しつつ抽象化したモデルとはいえ、「孤立した個人たち」が「協議し、公共で必要とされることについて、また、それを供給する手段について、合意形成を行う」に到るまでの間には、もう少し様々な段階が想定されておいてもよいだろう。国民形成や革命のような事態においては、そうした諸段階は現実的な影響力を持つ固有の現象ともなりうるはずであるし、孤立していた個々人の状態と、「協議し」たり「合意形成を行」えるほどの結びつきを確立した集団の状態というふたつにしても、ふつうは、スムーズに連結されていくとは言い難いもののはずである。

ここで考えさせられるのは、国民論や政治社会モデルは、あらかじめ人間集団論を土台にして検証装置として働くようにおくか、あるいは、人間集団論を同時に併走させて、そこからの補強を受けるようにすべきではないか、ということである。モデル思考が抽象に走るのは致し方ないとしても、重要な個所での大きすぎる過誤は避けるべきだろう。なんらかの方向に向かって形成されていく人間集団の発生過程については、もう少しニュアンスに富んだモデル把握が必要とされるはずである。

フランス革命研究の大家であるジョルジュ・ルフェーヴル Georges Lefebvre が『革命的群衆』*Les Foules révolutionnaires* (1932) において展開した考察は、こうした点で格好の補完の役割を担いうる視点のひとつを提供してくれそうに見え、スイエス的なモデル思考に対し鋭い批判を提供してくれそうでもある。

本稿では、革命や革命的現象の初期に発生する人間の動きについて、想像力を補完し直しておくという観点から、ルフェーヴルの群衆論の主要概念を概括しておきたい。

## 2 純粹状態の群衆 la foule à l'état pur、または集合体 agrégat

人間が集まった状態の考察にあたり、ルフェーヴルは、先ず、集合体 agrégat と結集体 rassemblement という用語で大枠を準備する。

この大枠のいちばん端には、集まる意思の最も低い人々からなる群衆として、「集まることを意図していない個人たちの一時的な集合体」<sup>(4)</sup> が想定されている。これは、観察者の目から見れば、その瞬間、同じ場所に居合わせて、集まっているかのように見えるものの、個人どうしは互いに見知っておらず、なんらかの共通した意図を持ってそこに現われたわけではない人々である。

こういう集まりの例として、ルフェーヴルは、「電車通過後の駅の周辺や、学校やオフィス、工場が終わった後に大挙して出てくる人々が、通りや広場で、買い物をする人たちや散歩する人たちに混じっていく際にできるもの」<sup>(5)</sup> を挙げている。

こうした純粹状態の群衆 la foule à l'état pur、または集合体 agrégat は、職場・学校と家庭との間に位置する路上の個人たちから成っており、自分たちの行動を社会化する様々な制度の場を一時的に免れている。形式上は社会の中にいるようでありながら、じつは社会を構成する諸々の制度の外に出ている。モーリス・アルブヴァクス Maurice Halbwachs<sup>(6)</sup> の指摘を生かしつつ、この点に言及しているのは、ルフェーヴルの慧眼といえる。

この言及は、社会制度と関連させて文学や映画などを捉える際には極めて有効に働く視座を提供してくれる。たとえば、政治経済や社会を扱った映画を多数制作してきた政治映画作家ジャン＝リュック・ゴダール Jean-Luc Godard の諸作や、政治と映画が露骨に切り結んだヌーヴェル・ヴァーグ Nouvelle Vague 期の監督たちの映画などに、なぜ、あれほど路上シーンが多用されるのかについて考察する際、ゴダールが、社会の中でも社会度の薄い場所にいる時の人物たちを意図的に選択して登場させていると

いう基本的な視線が得られる。ヌーヴェル・ヴァーグ期にあつてゴダールの盟友だったトリュフォー Francois Truffaut の『大人は判ってくれない *Les quatre cents coups*』(1959)でも、アントワヌ・ドワネル Antoine Doinel がなぜ家にも学校にも安住できないのか、なぜいつも街路に出るのか、さらには鑑別所を脱走して、なぜ何もない海岸へ逃れるのか、などについての基本的な理解の視点が定めやすくなる。ゴダール映画においても多くの主要人物たちはまさに路上に出ていくが、それに加えて、どの作品においてもあまりに頻出し続ける自動車の場面、つまり、走り出す前や停止後の自動車のまわりで絶えずくり返されるスラプスティックな取っ組みあいは、どれも、社会制度を逸れた特殊空間で発生していると思われるべきだと導かれていく。もちろん、これらのシーン理解の試みは、それが“路上”で発生し続けることによって、ジャック・ケルアック Jack Kerouac の『路上 *On the Road*』(1957)によって拓かれたアメリカのビート・ジェネレーション文学 Beat Generation との通底関係に容易に誘導されて行きうる。

ちなみに、こうした“路上”性、職場・学校と家庭との間に位置する個人たちをあえて扱う点は日本映画によっても共有されてきたもので、もっとも社会的政治的なアプローチから遠いと見えそうな小津安二郎においても、ルフェーヴルの提供する視点は有効に働く。蓮実重彦の分析によれば、家庭という制度場と会社という別の制度場の間の通勤区間の風景において「視線の等方向性と歩調の同一性という主題」を強調したショットが挿入される『早春』では、「視線の等方向性と歩調の一致という主題を如実に具現化している通勤者の群にまぎれこむことによって、池部良は妻の住まう家庭的空間を決定的に離れ、同じ通勤者の一人である岸恵子と過ちを犯すことになる」<sup>(7)</sup>。

### 3 結集体 rassemblement と集団心性 mentalité collective

ルフェーヴルによれば、人間の集まりは、純粹状態の群衆 la foule à l'état pur、または集合体 agrégat から、結集体 rassemblement のほうへと移っていく。

結集体は意識的に集まった個人たちから成る。そこでは当然、ある場所に集まるためにわざわざ自分たちの肉体を運んでいくだけの理由や考え方が、あらかじめ形成されていなければならない。必要なのはそれだけではない。ルフェーヴルはこのように説明している。

「結集体を前にして、我々はそれを、各人の意識の中で考えや情念が全き自律性をもって目覚めただけの人間たちの集まりである、と見なすわけにはいかない。行動するために彼らが集まるとすれば、彼らのあいだに心的相互作用 action intermentale があり、また、集団心性 mentalité collective の形成があるからである」<sup>(8)</sup>。

書物や思索から得られた考えや情念だけが人間を集まりへと赴かせるのではなく、集まってくる人間たちの心が互いに作用しあうことや、個々の心とは違う、集団としての心理構造がすでに形成されてきているからこそ人間は集まる、という理解で、例外もありうるとは思われるが、一般的には妥当な見方といえよう。

「集団心性」と訳した mentalité collective は、集団を成した個々人たちの心に共通して存在する心理構造を意味する。これがある場合、ひとりの人間の心の中には、個人としての個別の心理構造と、その集団で共通して分かち持たれる心理構造とが重なって存在することになる。

もちろん、心的相互作用や集団心性がなくても、集まりに赴く場合はありうるし、集まりを作る場合はありうる。個人の内的な考えや情念によるケースや、そこから発生してくる好奇心が理由となるケースもありうる。集団を調査したり、そこに潜入したりする理由から動くこともありうる。

ルフェーヴルにとって、この集団心性は重要な概念である。結集体を作るのはこれであり、革命において、外的・物質的な諸原因を最終結果に結びつけていくのもこれである、と彼は考えている。

革命研究を行う際のテーマとして、歴史家たちは、「革命的運動の原因だと彼らが考える経済的・社会的・政治的な諸条件」<sup>(9)</sup>を選んだり、結果にあたる「革命運動のめぼしい事件や運動の成果」<sup>(10)</sup>を選んだりしがちになるが、ルフェーヴルによれば、こうした原因と結果の間には、「集団心性の形成というファクターが介在して」<sup>(11)</sup>おり、これこそが、革命における「真の因果連関」<sup>(12)</sup>を作り出している。革命の観察においては、往々にして、原因とされる諸事実とは不釣合に見える結果が認められるが、そうした結果を正当に理解するためには、この集団心性という大きなファクターを読み込むことが必要となってくる。

そればかりか、歴史家は、政治的ないし社会的に観察される外からの姿の記述に留まることなく、革命に関わった諸階級の心的内実 *contenu mental* にまで達しなくてははいけないと彼は考える。個々人と集団とをたえず往還しながら革命心理が観察されていくような学が構想されなければならない、ということになる。

そこまでの作業や考察は現実には困難なはずだが、少なくとも革命が、「革命的運動の原因だと彼らが考える経済的・社会的・政治的な諸条件」と「革命運動のめぼしい事件や運動の成果」とを繋ぐだけで理解されるものではないとする反省は重要なものといえよう。

#### 4 半意識的集合体 *agrégats semi-volontaires*

ルフェーヴルは、集合体と結集体の間に中間的な性格の多くの結合形態 *réunions* があるのも忘れていない。彼は、これらを半意識的集合体 *agrégat semi-volontaire* と呼んでいる。

この形態では、個々人の意図にもとづいて各個人が集まってくる結集体

の段階を準備するような、集団心性の形成過程段階といえる。ルフューヴルは、農村においては農業作業、落穂拾い、日曜ごとのミサ、週市が、この半意識的集合体の現実的な場となっていた、としている。都市部の場合は、仕事場や街頭、居酒屋などがあるため、農村部以上の場をおのずと提供するが、とりわけ、パン屋に詰めかける人々の行列は格好の場となった。

いずれにしても、これらは生活上必要とされる場面での必然的な集まりで、なんらかの政治的ないし革命的な動きを組織するためのものではない。しかし、この形態においては、大勢が集まるのが普通であり、そこに行けば、自分もその大勢のひとりに入ることになるのがわかっている。これが定期的にくり返され続けていくことで集団心性が形成されていき、心的相互作用が発生していくばかりか、それは、時を経るごとに密になっていく。

集団心性や心的相互作用がある程度以上の濃さと緊密さに達している場合には、全員に同じように関わる心配事や恐怖が発生した際、半意識的集合体は急激に結集体へと変容を遂げうる。

## 5 革命的集団心性 *mentalité collective révolutionnaire* と革命的群衆 *foules révolutionnaires*

こうして、半意識的集合体まで見てくると、ルフューヴルが群衆論において用いる概念構成の大枠が出揃う。略述し直すとこのようになる。

- I 純粹状態の群衆、または（集まる意図を持たない人々の）集合体
- ↓
- II 半意識的集合体
- ↓
- III （集まる意図を持った人々の）結集体

I から III へ、集合体から結集体へと向かわせる力は、集団心性の強度であり濃度である。矢印の向きのほうへと集団心性は強く濃くなり、心的相互作用も密になっていく。歴史上の様々な場面で、一口に「群衆」や「民衆」などと呼んでしまいがちになる場合にも、最低限これらの段階に照らして、あり様を想定すべきだということになる。

もっとも、ルフェーヴルは、ここまで準備した上で、「純粹状態の群衆」は存在しない、と結論している。彼の言う「純粹状態の群衆」とは、「集まることを意図していない個人たちの、一時的な集合体」のことだが、いわば零度の群衆といえる「純粹状態の群衆」は、集団心性を帯びてはいけけない。各個人は、互いに共通する部分のない不均質な心性を持っていなければいけけない。

ところが、「純粹な集合体、純粹状態の群衆は、人類には存在しない」<sup>(13)</sup>と彼は言う。「我々はそれを不均質なものと定義したが、それが完全に不均質であることは決してなく、それを構成するメンバーたちはつねに、なんらかの程度において、集団心性を帯びているからである」<sup>(14)</sup>。

ルフェーヴル自身が「集まることを意図していない個人たちの、一時的な集合体」の例として出してきていたシーンを、もう一度見ておこう。「電車通過後の駅の周辺や、学校やオフィス、工場が終わった後に大挙して出てくる人々が、通りや広場で、買い物をする人たちや散歩する人たちに混じっていく際にできるもの」がそれだったが、「純粹状態の群衆」は存在しないと結論づける時点でのルフェーヴルの考えに沿って見直せば、こうした群衆は、勤め人、労働者、学生、主婦、家政婦などでありつつ、それぞれ、自分の属する身分や職業などのメンバーとしての集団心性を帯びていたり、その街の人間として、また、その地方民や国民としての集団心性を帯びていたりするということになる。全員が同質の集団心性を帯びていないにしても、限定的な範囲を持つ小規模の集団心性が複数存在していて、それらの重なりを個々人が多様なかたちで帯びていることが想定される。

こうした集団心性は、社会生活の様々なシーンで顕在化したり、潜在化したりする。本人にも意識されない状態になる場合もある。しかし、「村祭りのように生理的興奮」<sup>(15)</sup>が呼び起こされたり、「飢饉の時の市場やパン屋での行列の場合」<sup>(16)</sup>のように「反権力的」<sup>(17)</sup>な意識が心のうちに現われやすかったりする場面に置かれたり、また、大きな危険の到来に直面したりする場合には、集団心性は一気に強度を高め、心的相互作用が活発化して、集合体を集結体に変容させる事態となりうる。この場合、集団心性は、革命的集団心性 *mentalité collective révolutionnaire* と呼ばれる状態になり、群衆を、社会的、政治的、物質的な現実行動へと向かわせる。ここに、革命的群衆 *foules révolutionnaires* が発生する。

ルフェーヴルが「純粋状態の群衆」は存在しないと結論することに固執するのは、集合体としての群衆から集結体としての群衆への、短時間での変容を説明しうる手段を欲しているためであろう。

フランス革命時、1789年7月14日のバスティーユ牢獄襲撃後すぐに、夜盗集団来襲の噂を端を発し、村人たちが集結し、自衛武装を始めるに到った有名な〈大恐怖 *grande peur*〉が発生した。ルフェーヴルにはこれについて定評ある研究があるが、この〈大恐怖〉や革命の他の段階の研究に際して、彼は、群衆がいきなり攻撃的な集結体に変貌する事例にたびたび出会っている。事実として発生した事例には、すべて、しかるべき理由がなければならない。ルフェーヴルは、事例の発生構造の解明を強いられたのである。

## 6 平準化作用 *nivellement*

集合体・集結体モデルの大枠よりも細かい要素についての話になるが、半意識的集合体から、集まる意図を持った人々の集結体へと向かう段階で発生する興味深い現象として、ルフェーヴルは平準化作用 *nivellement* に言及している。

これは、心的相互作用によって引き起こされる精神の働きで、本来、ある対象に固有の特殊な問題や属性にすぎないものが認識上一般化され、他の対象に対しても乱暴に適用されることで、結果的に新たな別の事態や事件を引き起こしていく現象である。

たとえば、農民たちひとりひとりが、様々な理由から来る問題を抱えていて、これを苦情の種としているとする。やがて、それらをすべて、自分たちの領主の責任とみなすようになる。さらに、農民を苦しめるそうした属性は他のあらゆる領主にもつねに備わっているものとみなすようになっていき、領主の身分にある者たち皆が責任を負わねばならない、と考えられるようになっていく。

こうした認識上の粗い拡大化、定型化、紋切り型化が平準化作用であり、この作用の帰結として、対象は抽象化され、誇張され、歪められた典型がかたち作られていくに到る。領主が対象の場合ならば、典型的領主 *seigneur-type* がかたち作られ、この典型的イメージが農民たちの意識を支配するようになって、ひとりひとりの別個の人間としての実際の領主の個性や特殊性が無視されていく。フランス革命期を通じて、農民たちの意識を支配した〈アリストクラートの陰謀〉という疑念は、この平準化作用によって支えられていたと言える。

集合体—結集体モデルとの関係で見れば、心的相互作用によって平準化作用は生まれ、集団心性によって根深く堅固に共有されていく、という位置付けになろう。

## 7 集合体・結集体モデルの適用

実際のフランス革命史上の事態に対しては、ルフェーヴルは、集合体・結集体モデルをこのように適用している。

たとえば、バスティーユ牢獄襲撃を起こした1789年7月14日の群衆については、「つねに偶然だったわけではないにしても、少なくとも革命行動

とは関係のない諸理由から、まずは純粋な群衆として形成された」<sup>(18)</sup>。結集体と呼ぶのに必要とされる組織性が見られないためである。

他方、1792年6月20日のパリ、チュイルリー宮への群衆の武装侵入や、1793年6月2日の群衆によるジロンド派の国民公会からの追放、1792年8月10日のコムューン蜂起と王宮占拠、王権停止、1793年8月10日の共和国憲法公布、1795年5月20日のプレリアルの民衆蜂起などは、何らかの組織性が認められるため、結集体と呼ばれるべき事態だと見ている。

また、集合体から結集体への変容現象が発生した典型的な事態としては、1789年7月12日、多くは散策のためにパレ・ロワイヤル周辺に集まっていたと目される人々が、ネッケル罷免の報を聞いて、突如、結集体に変容したケース、1789年10月5日、パンの不足に抗議して集まった女性たちが、突如、結集体へと変容することで、ヴェルサイユの王宮への行進が発生、王をパリに連れ戻すに到ったケースを挙げている。

それぞれの事態を引き起こすことになった主要なファクターや動力を、個人の心理状態や集団の心理状態までも含めて探ろうとする際には、なるほど、集合体・結集体モデルは、ある程度は識別を便利にするために役立つしてくれるかもしれない。

とはいえ、上に挙げたバスティーユ牢獄襲撃のケースについて、ルフェーヴル自身が「つねに偶然だったわけではないにしても」という留保を付け、集合体ばかりでなく、半意識的集合体や結集体の要素も存在していたのを匂わしていることから、適用のしかたには慎重にならざるをえないところがあると見ておくべきだろう。

このバスティーユ牢獄襲撃については、現場に居合わせたシャトーブリアン Chateaubriand が回想録『墓の彼方からの回想』*Mémoires d'outre-tombe* に記している。この日の事態を「純粋な群衆」によるもの、集合体によるものと見るルフェーヴルの判断を頭に置きながら、該当箇所を見ておこう。

「7月14日、バスティーユ奪取。私は目撃者として、数人の傷痕軍人た

ちとひとりの弱気な軍司令官へ向けられた襲撃に居合わせた。門を閉めたままにしておけば、民衆が要塞の中に入ってしまうことは絶対になかっただろう。大砲からの砲撃を二三度見たが、それらは傷痕軍人たちによるものでなく、すでに塔に上っていた王国親衛隊によるものだった。ドゥ・ロネは隠れていた場所から引き出され、さんざん罵倒された後、パリ市庁舎の階段で意識を失った。パリ市長フレッセルはピストルの一撃を受け、頭骸骨骨折を負った。薄情なお目出度い連中が、晴れがましい光景と見なしていたもの、それがこれなのである。こういう殺戮のさなか、マルクス・サルウィウス・オトやアウルス・ウィテリウス・ゲルマニクス治下のローマの騒乱のように、人々は乱痴気騒ぎに身を委ねた。征服者として居酒屋でちやほやされ、幸せそうに酔っぱらったバステューの勝者たちは、辻馬車に乗せられて引きまわされた。娼婦たちやサン＝キュロットたちも我が物顔に振る舞い出していて、このお供をした。恐いものだから敬意を表しておけということ、これら英雄たちを前にして、通行人たちは帽子を脱いだ。英雄たちのうち何人かは、こうした勝利のさなか、疲労困憊して息絶えた。バステューの鍵は大量にコピーされ、世界中のどうしようもない馬鹿ども連中に送られた。せっかくの蓄財のチャンスを、私は何度逃したことだろう！目撃者に過ぎなかった私でも、勝利者たちのリストに名が載りさえすれば、今頃は年金を貰っていたらうに。

専門家たちはバステューの解体調査に駆けつけた。急ごしらえのカフェがテントの下に次々作られ、サン＝ジェルマンやロンシャンの市のように人々がひしめいた。どの塔の下でもたくさんの馬車が列をなして停まり、埃の渦の中で石の投げ渡しが続いた。群衆の歓声を受けながら、半裸の労働者たちが壁を壊していくのに混じって、上品に着飾った女たちや流行の装いをした若者たちも、ゴシック様式の様々な異なった段階の残骸の上に出て来ていた。こうして出来上がった溜まり場で、最も有名な雄弁家たち、最もよく知られた文士たち、最も有名な画家たち、最も盛名高い俳優や女優たち、いちばん流行りのダンサーたち、最も有名な外国人たち、

宮廷の貴族たちやヨーロッパの外交官たちが会したのだった。古いフランスは終焉するために此処に来、新しいフランスは始まるために此処に来ていた」<sup>(19)</sup>。

パリの宿泊先にいたシャトーブリアンは、数日後、次のような光景を目のあたりにする。

「私は、家具付きの住まいの窓辺に、姉たちや何人かのブルターニュの人たちといた。『門を閉めろ！ 門を閉めろ！』という叫びが聞こえる。ぼろ着の集団が通りのむこうからやって来る。この集団の中に旗が立っていたが、遠くてよく見えなかった。こちらへ進んできた時、髪が乱れ、顔の歪んだ首がふたつ見えた。マラーの先駆けとなった者たちが、槍の先に首をひとつずつ突き刺していたのだ。フロン氏とベルチエ氏の頭だった。皆、窓から引き下がったが、私はそこに残った。殺戮者たちは私の前で止まり、歌ったりはしゃいだり、跳ねまわったりしながら、槍を私のほうへ突き出し、これらの青ざめた肖像を私の顔に近づけた。ひとつの頭からは目が飛び出して、死顔の上へと垂れていた。開いた口から槍が出ている。歯が鉄刃を噛んでいた。『悪党どもが！』と私は叫んだ。やるかたない憤りがあった。『おまえたち、自由とはこういうものだと思っているのか？』。もし銃を持っていれば、狼にぶっばなすように、この悪党連中を撃ったことだろう。彼らは怒号を上げ、何度も何度も表門を叩いて、中に入って来ようとした。私の首も、いっしょに犠牲者たちの首に混ぜようとしたのだ。姉たちは気分を悪くし、臆病な他の住人たちは、私に批難を浴びせかけた。この殺戮者たちは追われているところで、此処を占拠している時間はなかったため、遠ざかって行った。この時に見た人間の首や、すぐ後で遭遇することになった他の首が、私の政治的傾向を変えたのだ。食人鬼どもの宴に恐れを抱いた私に、フランスを離れて、どこか遠い国に移るという考えが芽生えた」<sup>(20)</sup>。

集合体や結集体という概念が妥当かどうかというより、それらでは捕捉しきれない、もっと多様な、過剰なまでの人間模様が溢れ返っていたと考

えておく必要がありそうである。

商店の雇い人を父に持ち、辛苦の生活を母方の家も強いられていたという庶民出の歴史家ルフェーヴルは、裕福な知的エリートとして成長したのでもないため、民衆の実生活への感受性は他の歴史家より秀でていられるが、それでも、抽象的なモデルを準備しようとする際には、当時の現場を生きてきたシャトーブリアンの叙述と比して、このように貧相になってしまう。ルフェーヴルの責任というより、歴史現象を捉えることの困難というべきだろう。言葉や一定の枠組みを用いてしか対象に迫ることのできない人間の思考そのものの限界に直面し続けながら、やはり、方法論の再考へと何度となく引き戻されていかざるをえないようだ。

#### 注

- (1) スイエスは政治社会が、意思の三段階を経て発展するとする明瞭なモデルを構想した。個人意思 *volontés individuelles*、共通意思 *volonté commune* (現実共通意思 *volonté commune réelle*)、代表共通意思 *volonté commune représentative* の三段階である。詳しくは拙論『第三身分とは何か』第5章における「国民」と「憲法」(中央学院大学法学論叢第30巻第2号、2017年2月)を参照されたい。
- (2) Sieyès, *Qu'est-ce que le tiers-état?*, Flammarion, «Champs classiques», 1988, p. 123.
- (3) *Ibid.*, p. 123-124.
- (4) Georges Lefebvre, *Les Foules révolutionnaires*, dans *La grande peur de 1789 Suivi de Les Foules révolutionnaires*, Armand Colin, 2014, p. 267. 日本語訳は、岩波文庫版の二宮宏之訳『革命的群衆』(2007)があり、随時参考にさせて戴いた。
- (5) *Ibid.*, p. 267.
- (6) Maurice Halbwachs (1877-1945) はフランスの社会学者。集合的記憶 *mémoire collective* を提唱。社会学と心理学の融合を図り、知識社会学を推進。ベルクソン、デュルケムに学ぶ。マルクス主義と経済学も研究。強制収容所で死去。
- (7) 蓮實重彦『監督 小津安二郎』(筑摩書房、1983) p. 106.
- (8) *Ibid.*, p. 266. *action intermentale* を「心的相互作用」とする訳は、岩波文庫の二宮宏之訳を借りた。心と心との間に働く作用を言っているので、

「間心的作用」とも訳しうる。mentalité collective は「集団心性」と訳したが、二宮訳では「集合心性」となっている。「共通心性」とも「集団的心理構造」とも訳しうるこの用語は、解釈の幅を残している。

- (9) Georges Lefebvre, *Les Foules révolutionnaires*, dans *La grande peur de 1789 Suivi de Les Foules révolutionnaires*, Armamnd Colin, 2014, p. 266.
- (10) Ibid., p. 266.
- (11) Ibid., p. 266.
- (12) Ibid., p. 266.
- (13) Ibid., p. 272.
- (14) Ibid., p. 272.
- (15) Ibid., p. 273.
- (16) Ibid., p. 273.
- (17) Ibid., p. 273.
- (18) Ibid., p. 265.
- (19) Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe* I, édition de Maurice Levaillant et Georges Moulinier, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1951. p.p. 168-169.
- (20) Ibid., p. 171.